



同志社人物誌 (70)

中 島 力 造

佐 野 安 仁

(一)

明治期に「倫理学の学としての独立性」を確立した中島力造は、同志社英学校(明治八年一月二九日開校の第一回の入学生であった。厳密に言えば、開校一番の入学生は元良(杉田)勇次郎であり、続いて本間重慶、二階堂(横山)円造が入学し、その後、上野栄三郎、中島力造が入学した。彼らは明治八年の入学者であり翌年明治九年に入学した熊本バンドの青年たちより早く同志社英学校に入学していたことから第一回の入学生ということにな

っている。熊本バンドの青年たちを含めて同志社英学校の第一回の卒業生は、一五名で、その卒業式は一八七九(明治一二年)の六月二二日であった。卒業生は海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝、横井時雄など熊本バンドの青年たちで、元良勇次郎や中島力造の名前はない。元良も中島も中途で退学している。元良については『同志社時報』(一九八八年八五号)に記載されているので、ここでは中島についてふりたい。中島が同志社英学校に入学したのは、新島襄の勧めによる。新島とどのような経緯で出会ったかは明らかでないが、中島は「私

は京都で新島先生に御目に懸かったもので、それから同志社に来る事になった」とのべており、また、「好い学校があったら行きたいと思って居たとき、丁度、同志社が創^{はじま}ったので直ぐ行く事にした」とも語っている。

中島が同志社で学びたかったことは、哲学であった。しかし、熊本バンドの青年たちの多くは、基督教に興味を持っており、また神学を研究していたので、同志社の全体的な雰囲気は、中島によれば「兎角宗教の方面に偏っていた」ようである。中島は、「宗教に興味を持って居らなかった故」に、この宗教的な偏りが、気に入らなかった。そこで、彼は、「早く都合して他に行かうと思つて居た」とのべている。

ところが、基督教を嫌っていたはずの中島が、一八七七(明治一〇年)一月二日、京都第二公会同志社教会で洗礼を受けている。これは新島の導きによるものであった。新島は、中島に学問上の干渉はしなかった。中島は自由から自らの関心で学問を深めようとした。そんな中島に新島は、教会にだけは出席するようにと絶えず勧告していた。それが入信の契機となったようである。

しかし、中島の学問的関心は、やはり哲学にあった。新島は、中島の心境を察してか、彼を津田仙の学農社に教師として送りだすことにした。一八七八(明治一二)年のことであった。中島は「新島先生の推薦で或る学校の教師となったので退学した」と語っている。

その後、中島は一〇年に及ぶ留学生生活を経て文科大学の教授となりわが国における倫理学の先登として明治期の学術の発展に大きく貢献している。新島の薰陶を受けつつ、中途で同志社を去った人たちのなかに、わが国の学術研究に先駆者として貢献した人たちがいる。心理学の松本亦太郎や動物学の五島清太郎は、その代表的な人たちである。こうした学術上の泰斗が、草創期の同志社を通過していることをみのがしてはならない。

(二)

中島力造は、一八五八(安政五)年一月八日に中島勘右衛門の長男として丹波国天田郡福知山町(京都府下)に生れた。幼少期、藩立惇明館にて漢学を修業し、さらに神戸に出向き洋学の修業を志ざした。中島の父勘右衛門は、

率先して斬髪を断行したり、生絲の製法に關して改良を講じたり、私財を投じて河川の改修など公共事業につくしたり、新しい文明を積極的に摂取するように青年を励ますなどして、時代の先頭を歩んでいたようである。長男、力造にも、まず「西洋の文物学芸を研究せねばならない」という考えで、早くから神戸に送りだし、英学、西洋思想にふれさせようとした。神戸時代、中島はまさに英学に専念したようであるが、詳しいことは不明である。中島は「よき学校があつたら入学したい」と願っていたことから神戸では、個人的に誰かに師事していたのかもしれない。

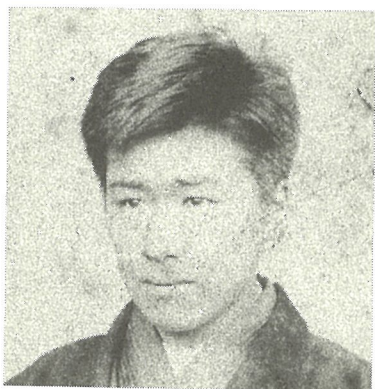
一八七五(明治八)年一月に同志社英学校が開校されると同時に第一回の入学生として入学した中島は、それ以前に新島襄と京都で出会っている。前述のように「京都で新島先生に御目に懸かつたので、それから同志社に来る事になった」と語っている。新島は中島と出会ったとき英学校設立の計画を語ったようである。中島は「西洋の学問をするつもりならば、その学校(同志社)に入つて勉強してはどうか」と新島に勧められた。上京するつもりでいた中島は、新島の勧めに従つて同志

社に入学した。

中島によれば開校当時、「教師はデビス先生と新島先生の二人が主で、其他日本人の先生が一、二名居つた」ようだ。中島は、新島から代数と物理を習つた。バイブルの講義は、新島の家で朝早く行われていた。その他は書物を勝手に読むということで自学自習の形態をとっていた。中島は歴史や哲学の書物を新島やデイヴィスから借りて読んでいた。新島は中島らに読むべき書物を紹介し、貸出していた。中島は新島からヘブンの心理学を習い、後にラーネッドから地質学を学んだ。そのほかの時間は、ほとんど読書三昧であつた。とりわけ中島は、J・S・ミルの哲学書に傾倒し、その自由論には特に関心を示していた。ミルの哲学に関しては、新島と激論し、新島を困らせたようであつた。

中島は福知山の出身であり、神戸に出るとき三田に一泊する習いであつたことから、三田出身の元良とは出身地の話を縁に懇意に付き合うようになり、その交際は、学農社時代から東京大学の教授時代を通して終生たえることがなかつた。

中島は、元良と同様に新島をしばしば敵し



同志社英学校時代（明治10年頃）

い質問で困惑させたようであるが、新島に対する信頼は厚く、新島から多くを学んでいた。また、日本の将来について、宗教について親しく語り合うこともあり、翻訳などの手ほどきも受けていた。さらに中島は新島の理解者でもあった。中島によれば、新島に対して不満をもつ者は随分と多かったようである。新島は外国人（宣教師）と日本人（熊本バンド）との双方からの不満の間に在って、つねにその調整と打開につとめていた。これを中島は外国人と日本人との間に在って、困難に打ち勝ったのは、「誠に先生の偉い所であって、始めて此の事業の緒口は先生によって開かれた

のである」と語っている。新島は、中島の学究的な意欲とその態度を高く評価し、また、学力面でのすばらしさも認めていた。

そこで新島は、一八七八（明治一二）年に津田仙から学農社の教師に誰かを推薦してほしいと依頼されたとき、まず中島を推挙した。中島は新島の推薦により同志社英学校を中退し、上京することになった。

(三)

津田仙は、新島と親しい関係にあったことから長子元親、次男次郎の教育を同志社の新島に託し、同志社で育成された青年たちを学農社の協力者として迎え入れようとしていた。中島に続いて元良や岡田松生も学農社に迎えられた。

中島は学農社で教鞭をとりつつさらに学修のため留学を志していた。しかし父勘右衛門の事業が財政的に困難な状態にあったことから断念せざるをえなかった。津田仙は、中島の胸中を察し子息の洋行に中島を同行させることにし、その費用を給与した。中島の米国留学は、こうした経緯で実現したのであるが、

このとき勝海舟も中島に「困る事があつたら何時でも言つて来い」と励ましている。

一八八〇（明治二三年）にオハイオ州ウエスタン・レゾルスカデミーに入学した中島は、一八八四（明治一七年）に同校を卒業し、さらにイエール大学の神学科に進み、同校を一八八七（明治二〇）年に卒業した。その翌年には同校の哲学科にてポーター教授に師事し哲学、倫理学を学び、「カントのthing-in-itself」と題する論文を提出して哲学博士の学位を取得した。中島は、短期間ではあったがイエール大学の哲学史の講師となり講義を担当した。一八八九（明治二三年）には英独両国に学び、翌年の明治二三年六月に、一〇年に及ぶ海外生活を終えて帰国した。ドイツに滞在中、中島は井上哲次郎と始めて逢った。

帰国した中島は、その年、第一高等学校の教授となり、また九月から文科大学で倫理学を担当することになった。一八九二（明治二五年）には文科大学の教授となり、その翌年より「心理学・倫理学・論理学」の第二講座（倫理学）を担当することになった。中島はこの講座の初代の教授として一九一八（大正七）年まで担当し、東京大学の倫理学講座の創設と基

礎形成に尽力し、「倫理学の学としての独立性」を確立した。

(四)

中島は、留学中、「英国新カント学派」の思想、とりわけT・H・グリーンンの「自我実現説」に関心をもち、帰国後、この思想をわが国の倫理学界に導入した。中島によれば英国新カント学派の思想は「要するにカントの哲学をヘーゲルの眼を以て読んだもの、ヘーゲルの立脚点からカントの足らざる所を補ひ、説明せんとしたもの」(『晩近倫理學書附録』)である。

桑木嚴翼によれば「元來倫理は其までは訓話のみであつて、主として漢学の先生が經書の文句などを題目として特別の倫理講堂において莊嚴に講ぜられたものであつた」が、明治二〇年代に至り、「道義學」としてベンサムやミルの功利主義、スペンサーの進化論などの思想が講ぜられるようになった。中島による英国新カント学派の導入は、功利主義の倫理学に対し理想主義の倫理学をもつて倫理学研究を拡充しようと意図したものであり、わ

が国の倫理學研究を一段と學究的なものにした。桑木は、中島によつて、學究的な倫理學研究が始められるようになったと指摘している。なお「道義學」を「倫理學」と改めたのは井上哲次郎である。

中島は、T・H・グリーンンの「自我實現説」に基づく倫理學だけでなく、J・デューイの倫理説やH・シジウィクの倫理思想を日本にはじめて紹介している。井上哲次郎は「中島博士は西洋の倫理學説を忠実に紹介し講述するにつとめられた」と語っている。これに対して「元良博士は何か新しいものを創造することに熱中して居られた」ようである。中島も西洋倫理思想の紹介だけに終わったわけではない。「中島は、古今の倫理學説を探究して問題を取り出そうとする『歴史的方法』、個人精神における道德現象を確かめる『心理學的方法』、制度・慣習の変遷差異を問う『社會學的方法』の三つをあげ、これらを帰納方的態度で駆使する科學的倫理學を展開した」(『東京大學百年史・部局史』)と指摘されているように、倫理學の科學的研究の開拓に大きく貢獻している。しかし、何よりも中島の功績は、T・H・グリーンンの「自我實現説」に基づいて人

格主義、理想主義の倫理思想を提唱し、「人格」の概念をわが國に普及させたことであり、前述のように「倫理學の學としての獨立性」を確立したことである。

(五)

文科大学の創成期において倫理學の確立に尽力し、多くの門下生を薰陶するとともに、わが國の學術上の開拓に貢獻した中島は、井上によれば「平和溫柔の人で、あまり議論などして人と争ふようなことはしなかつた」ようである。門下生、藤井章によれば、學生に對しても、いつも「何某さん」と呼んでいた。この呼び方には「何となく軟か味と溫か味」があり、中島の溫和な性格が表出されていた。藤井は、こうした中島を「學徳共に具現せる師」であり「全く慈父に接する様でもあつた」と回顧している。

こうした溫和な性格からか中島は、井上哲次郎と對立することを避けていた。中島が教授に就任したころ、内村鑑三の不敬事件を契機に井上のキリスト教攻撃がはじまつていた。この井上のキリスト教攻撃は、同志社を

背景とする元良や中島の立場を微妙なものにした。元良は大西祝と井上に反論し、中島は内村の相談役を引き受けていた。だが、中島は内村の相談に十分に応えていない。井上に対する気づかいからか中島は、自らの見解を鮮明にしなかった。井上、元良、中島は、文科大学を明治期から大正の初期まで協力して支えてきた。とくに三者共同で一九一（明治四四）年に『哲学学彙』を執筆、出版している。こうした点で、中島はかなり井上に協調していたように思われる。

だが、同志社との関係が稀薄なただけではない。元良や中島から指導を受けた和田淋熊が、一九〇〇明治三三年に同志社の教授として着任し、同志社の教育に献身することになった。この人事は、同志社の要請で中島が和田を推挙したことによる。中島は同志社の教育を支援しようとしていた。彼は、同志社の初期の卒業生たちとの交際を絶たなかった。

一九一八（大正七）年二月二日、中島は流行性感冒をこじらせ、享年五九歳でこの世を去った。中島の納棺の式を司ったのは綱島佳吉牧師であった。綱島は「中島氏は京都同

志社出身の三尊の一人なり、三尊とは故大西祝氏、故元良先生及び中島氏なり。」とのべ「遂に今や第三角崩れたり」と中島の逝去を悼み、また「余は故人が六十一年の充実せる生活を完了して神の御座に至りたるを大いに光榮としてこれを神に謝し奉らんとす」のべている。葬儀は二四日、基督教の儀式の下に青山の斎場で執行された。

中島は一九〇〇（明治三三年）に文学博士の学位を授けており、『晩近倫理学書』（明治二九年）をはじめ三四冊の著書を公刊し、また多くの教科書を校閲し執筆している。さらに、中島は明治三八年に「読書会」を創設した。これは「西洋の倫理学の新著を解説し批判すること」を目的としたもので、これにより多くの学生を啓発した。哲学会、丁西倫理学会などにも熱心で、わが国の学会活動の基盤形成にも貢献している。弟子の藤井健治郎は、中島の学風を『徐々に而かも堅実』に問題の核心に接近し、之を闡明するを期したるが如し」と評している。中島は、そのために明治から大正にかけて、まさに学術の「堅牢にして広大なる基礎」の形成に尽力して、その生涯をとじたといえよう。

（大学文学部教授）

参考文献

- 『丁西倫理会倫理講演集』一九八号（大正八年）四三六号（昭和一四年）
- 『哲学雑誌』三八四号（大正八年）
- 『哲学研究』三五号（大正八年）
- 『東京大学百年史』（部局史一）
- 『元良博士と現代の心理学』（大正二年）